しかし、私達日本人は日本が朝鮮を植民地として支配しているということを、全く意識していなかったのではないかと思うのです。そういう自覚すらなかったのです。私達は被征服者の心情を推し量るどころか、傲慢にもそれを踏みにじり、朝鮮人を日本人に同化しようとさえしたのです。人の足を踏みつけておいて、民族融和も内鮮一体もへちまもあったものではありません。私は朝鮮にいましたが、正直言って何ひとつ朝鮮のことを理解しようとしませんでした。朝鮮の言葉を覚えようともしませんでした。朝鮮人のアイデンティティーなど爪の垢ほども思ったことはありませんでした。これでは朝鮮人の友人が1人もできないのは当たり前です。そして戦争が終わりました。その時ここは私達のいる場所ではないということを初めて自覚しました。

私は朝鮮から引き揚げ、愛知大学で民主主義の教育を受けました。そして日本の近代史を学びました。明治維新以後、日韓関係が非常に不幸な経過を辿ったことは皆さんもご承知の通りであります。日韓関係の歴史は日本近代史の1つの側面であるというよりは、明治以来日本が突き進んできた思想と行動の軌跡が、本質的にそこに象徴されているという意味において、正に日本の近代史そのものであると言わなければなりません。そのことの強烈な反省無しには、真の日韓友好はあり得ないと私は思っています。今日日韓双方のあいだで未来志向ということで友好に努力していますが、まだまだもちろん充分に癒されてるとは言えません。私達は若い世代の皆さんに託するより他ありません。それはアジアの友好と平和、この1点に尽きるのではないかと思います。愛知大学はその創立、生い立ちの経緯から見て、誠に稀有の大学であります。その建学の精神に立脚し、指導的立場に立って社会に貢献できるような大学であってほしいなと思っております。大変僭越ではございましたが、これで私のお話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

【司会】 どうもありがとうございました。ご質問等ございますでしょうか。よろしいでしょうか。特に無いようでしたら後半のほうへまた持ち込ませていただいて。どうもありがとうございました。そうしましたら次は4番目の佐藤先生です。建国大学のご出身で、愛知大学にご入学されました。卒業後昭和25年に三和銀行に入られまして都内の支店長を経て、ニチイ株式会社取締役に就任され、現在日中貿易会社を経営されています。現在でも本当にお忙しく日中間を行き来されておられます。ではよろしくお願いいたします。

【佐藤】 私は建国大学に行っておったわけでございますけれども、建国大学はご承知かと思うんですが日本の大学ではございませんで、満州国、中国では今、偽満（ウエィマン）と言ってるんですけれども、満州国の大学です。従いまして学生も日本人が75名、その他、中国系、あるいは蒙古、朝鮮、白系ロシア、台湾、みんな入れまして1学年が150名。従いましてちょっと創立のいきさつから、学校の中の生活状況等、他の大学の皆さん方と違いますので、その辺をご紹介したいと思います。設立ですけれども、日本の大陸経営の戦略は、日清日露両戦役の勝利の結果取得した遼東半島を中心とした旧満州、現在の東北地区を主たる対象としております。中国清朝の衰退と辛亥革命（1911（明治44）年）による中華民国の成立、軍閥および中国共産党との内戦による疲弊と苦難にあえぐ国民政府を相手にして着々と満州の権益を拡大いたしました。やがて日本は、満州は日本の生命線だという認識に立って、柳条湖事件（1931年9月18日）を引き起こし、翌1932（昭和7）年には満州国を独立せしめ、清朝最後の皇帝溥儀を執政として迎え、さらに1934（昭和9）年3月1日に帝政を実施して溥儀を満州国皇帝として迎えたということであります。

これに対して関東軍および満州国政府は、国家

統一の人材を育成する大学を創立する必要を感ずるに到ります。当初の構想はアジア大学として、教師は世界各国の著名な学者および若干の指導者を招聘し、学生も満州に居留する各民族の青年のみでなく、広く中国・インドおよびアジア各国から青年を受け入れ、マルクス主義に反対するが帝国主義にも反対する、いわゆる満州国学を特色とする１つの新型の大学の設立を目指したのであります。しかし 1937（昭和 12）年７月７日の支那事変の勃発により国際情勢が一変し、アジア大学構想も受け入れられず、関東軍と国務院では相次いで建国大学創設を可決。建大創設準備を着々と実行し、生徒の募集、教員の確保に務め、1938（昭和 13）年５月２日、建国大学開学勅語下賜のもとで開学式と入学式を行ないます。

建国大学創立の目的および内容ですが、建国大学令の第１条に次の通りあります。「建国大学は建国精神の神髄の体得、学問の蘊奥を究め、身を以って之を実践し、道義世界建設の先覚的指導者たる人材を養成するのを目的とする。学習年限は６年とし、前期３年、後期３年とする。前期は高等普通教育を行ない、建国精神の理論的研究と、軍事訓練、労働訓練に重点を置き、かつ第１、第２外国語の教育を行なう。後期は専門分野に分かれ、政治・経済・文教を学ぶ。大学は大学院および研究院を設立し、前者は主として実務経験のある建大卒業生の中から招致し、造詣をさらに深める。後者は主としていわゆる満州国学を研究し、政府当局の政策を定める場合の参考になる資料を提供し、また建大の教育内容を充実させるための教材の提供と建議を行なうものとする。」大学総長は総理大臣、張景恵がこれに当たる。副総長にはかつて湖北法制学院で中国人に対する教育の経験があり、また東京大学法学部卒業でありながら経済学博士号を取った京都大学経済学部長を担当したことのある作田荘一氏を適任として選定します。教師は大多数は日本の各大学から招聘されました。学生の募集については 1938（昭和 13）年第１期生 150 人、うち日本人 75 名、漢民族 50 名、その他 25 人は朝鮮・蒙古・台湾・白系ロシアとなった。朝日新聞によりますと、当時学生の建大受験者は約１万名である。誠に狭き門でありました。満系 50 名の学生も、数千名の応募者の中から選抜されたとのことです。張景恵総理の息子は不合格になりました。

５月２日に下賜された開学勅語の中で、「建国大学は国の骨幹棟梁の人材を育成する。本大学はわが国の最高学府であり、政治教育の本源、文化の精粋、経天地緯の学、治国平天下の道をここに教え、ここに学び、天下に及ぼし、極みなし」と述べられています。建大精神として強調されたのは、まず満州国の政治・経済・文教各方面の経営管理の任に堪えられる人材を作ることであり、近代的な知識偏重教育を捨て、知行合一の精神と、健全な心身を持った人材を養成することであります。従って前期では普通の文化知識を学習し、後期では分かれて政治・経済・文教を専攻した他、前期後期を問わず各種の訓練と東洋・西洋の倫理・道徳を学ぶことを重視しました。さらに重要なことは、各民族の学生が同じところに住み、同じものを食べ、同じものを着、同じことを学び、同じ労働をする塾生活をすることにより、民族間にある矛盾感を調和する理論と体験を会得することであります。

従いまして次は塾生活になります。住居は塾と言い、塾は１棟ずつの平屋であり、中央に出入口がある。左側に寝室があり、寝室の真ん中に通路、両側に日系・満系が交互に枕を通路に向けて寝ます。寝具は正確に折り畳んで積み重ね、折り目は常に正確。各自それぞれ歩兵銃が支給される。寝室の外側中央に銃架がある。塾頭室もここにある。寝室の反対側に自習室がある。20 数名各自机を持っています。毎朝太鼓の音と共に起床。塾毎に養正堂の前に整列し、点呼を受ける。皇居と皇宮を遥拝し、週１回建国忠霊廟に参拝。一般に午前は教室で授業。午後は武道・軍事訓練・農業訓練

を受ける。塾生活は各民族が共同生活する中でお互いに切磋琢磨し、お互いを理解し、次第に親近感を増し、ついには友情が芽生え一体感を得ることを目指しております。

開学当初は日系・満系共に新満州国の最高学府に学ぶことの高揚感があり、いかに建国精神を体得するかについて真剣に議論し合っていましたが、時を経るにつれ戦局と国際情勢の変化から、満系のあいだに微妙な変化が見られました。建大には研究室と図書館があって、大量のマルクス主義を始めとする各種の思想関係の書物や、一部中国文の出版物も蔵書されており、全ての学生に自由に貸し出されていました。当時の作田副総長は、満州国学の完成を目指し、それを学ぶことによりマルクス主義の本を読んでもよく咀嚼し、批判等ができるならば構わない、という姿勢でありました。学生達は好みに合わせて手当たり次第に本を読み、孫文の「三民主義」、蒋介石の「中国の命運」、魯迅・巴金・茅盾・ニーチェ・ゲーテ・ゴーゴリの作品等、あらゆる系統の書物がありました。彼らはこの恵まれた環境を充分利用し、次第に傾向の合った者同士が集まり、組や班ができ、マルクス主義的思想への入門書を始め徐々に左傾的な書物の確保に努め、読書後口論を重ねて反満抗日の思想に傾いていく者が増えてきました。

1942（昭和17）年3月2日、15名が反満抗日の政治犯容疑で憲兵隊の検挙を受ける。彼らは憲兵隊で殴打拷問を受けたが、1943年4月満州国高等法院は裁判の結果無期懲役2名、懲役15年1名、13年2名、10年、8年各1名、5年4名、執行猶予5年4名の刑を言い渡した。うち1名は入獄して間もなく精神錯乱し、取り押さえようとした日本人看守長の刀傷が元で敗血症になり死亡しました。他の1名は獄中で病を得、医者の適当な治療を受けられず犠牲となりました。それぞれ24歳と26歳でありました。獄死した2名は反満抗日の先駆者として今でも建大同窓の心の中に生きております。作田副総長はこの責任を取って辞任し、関東軍退役中将の尾高亀蔵が後任となりました。学内の統制は次第に厳しくなりましたが満系の読書活動は逆に進行し、1・2・3期から4・5・6・7・8期と次々に引き継がれ、終戦時まで続きました。関内・重慶・延安等に走る同窓もありましたが、地下組織との連絡が付かず、少数に留まりました。

終戦と愛知大学。私は1943（昭和18）年建大5期として入学。1945（昭和20）年4月ソ満国境の山神府に現役入隊。6月嫩江を経てハルピンに撤退。日本人街で塹壕を掘り、ソ連軍を迎える準備をしますが、8月15日戦わずしてソ連軍の捕虜となり、ハルピン競馬場で武装解除され、牡丹江から9月末シベリアに送られました。シベリアでは1日1食。黒パンと薄いスープの食事で重労働を強いられ、不衛生から発疹チフスが蔓延し、栄養失調と相まって多数の死者（シベリア全体では6～7万と言われます）が出ました。私も1月中旬発疹チフスにかかりましたが幸いソ連軍の巡回女医に出会い、入院を命ぜられ、九死に一生を得ました。病気は治りましたが相変わらず栄養失調であったため、やがて帰国を命ぜられ、8月ナホトカより乗船し、北朝鮮の咸興を経由して12月佐世保に上陸。1946年12月29日四日市の自宅に帰りました。

両親共天津より帰国済みでありました。帰国後は体力の回復に努めました。父より「豊橋に東亜同文書院の先生方が中心となって愛知大学が設立され、引き揚げ学校の受皿となっているが、お前も行ったらどうだ」と言われました。兄からも勧められ、転入学を決意。1947年3月、学部がまだ無かったので予科3年に編入。4月から法経学部に進みました。学校は旧陸軍予備士官学校（ここですね）の建物を使用。寮・教室・事務所等簡素でありましたが、学生・教職員共明るく希望に燃え、戦後日本の物資不足の窮乏に耐え、学業に勤しみました。建大からは合計11名（中退3名を含む）が転入学し、私は岡崎の知人宅から通い

ましたが、１年間でほとんど単位を取り、２年目からは名古屋の経済調査庁で雇員として働きました。卒業論文には米国の経済力集中問題の原書を読んで作成、提出したことを覚えております。

学内は東亜同文書院を始め大陸の経験者が多く、戦争の反省から日中友好の校是が確立しており快適な環境であって、いずれ時が来ればまた中国との関係を持ちたいという願いを持ち続けてきました。長春に残った満系の同窓達は、大部分1946年国民政府設立の長春大学に転入し、学業を継続しましたが、やがて長春は共産党が政権を掌握し、長春大学は東北人民大学となり、さらに改称され現在の東北師範大学となって、同窓生達は東北師範大学の卒業生が多い。

同窓会活動。正式な第１回同窓会総会は1954(昭和29)年５月２日に、1938(昭和13)年５月２日の開学記念日を卜して、虎ノ門共済会館において開催されました。まだ海外同窓との連絡はほとんど取れず、日本のみの同窓会として発足しました。その後同窓会総会会報、名簿等徐々に整備され、海外でも韓国・台湾で同窓会が発足し、中国では地区毎にまとまり、互いに連絡をしております。彼らは日本の同窓会名簿を活用しております。1955年、1957年と、陳抗（私と同じ５期）が来日し、さらにLT貿易連絡事務所の秘書長(孫平化所長の時）として1964年に来日。その後寥承志事務所の代表として着任。また国交回復後は大使館員として、さらに最後は初代の札幌総領事として長年にわたって留日し、多くの同窓生との交流に努め、日中友好に大きな貢献をいたしました。また日中同窓生を募り長春大学を設立したのは見事と言う他はありません。題字は元首相の李鵬氏が書きました。

現在私は陳抗の子息の陳燕生と共に、コンピューターソフト会社を同窓の３名と共に経営しておりますが、同窓の縁は子々孫々まで引き継いでいきたいと思っております。陳抗は1944年夏休みに蓋平に帰省し、いとこに禁書を貸しましたが、これがばれて蓋平の警察に逮捕されました。石田塾頭は大変心を傷め、瀋陽の李松林の自宅を訪問。実状を知り、蓋平に赴き保証人となり身柄の引き受けを致しました。戦後陳抗は寥承志事務所に着任、石田先生と会い、深い感謝の念を込めて往時を語り合いました。また李松林は石田塾頭の鍵のかかっていない机の引出しから、禁書である毛沢東の『新民主主義論』を黙って持ち出し、リレー式に皆で書を写し、回し読みをしました。この本は毛沢東思想の啓発書で、その後毛沢東思想の基礎となったものであり、どうして石田先生がこのような本を引出しに入れ鍵をかけなかったか皆不思議がりました。戦後李松林は大阪での同窓会終了後、石田先生と寝室を共にし、長い一夜を語り明かしたことがありますが、正に感無量とのことでありました。石田先生は東亜同文書院の出身で、塾頭の中で唯一、満系学生の信頼の厚い人物でありました。現在103歳。同窓会活動としては数多くの同窓子女の留学の世話、ビザの取得、保証人、あるいは１人毎に10万円の補助、アルバイト、就職斡旋等、各方面で役立つように頑張っています。

私個人としては上海在住の喬世隆の息子喬海光夫婦の留学保証を行ない、卒業後共に香港に会社を設立、移転後上海に今もあります。それから大連の林承棟（８期)。彼が大連市の秘書長の時に、その頃私が勤務していたニチイが百貨店を作るということで、市とのあいだを斡旋して百貨店が今できている。あるいは魚介類の斡旋とか、いろんな面で協力をしてくれました。おととし大連へ行きました時糖尿病で寝ておりましたけれども、元気に同窓生の消息を尋ねておりましたが、その後残念ながら亡くなりました。

建大の評価ですが、日本側としては大学設立の目的は達成されなかったが、他方中国側では全国人民大会中央委員、吉林省書記、人民日報社長の高狄（８期）を始めとし、先ほど言いました陳抗とか、あるいは５期の李孟競等外交官を始めとし

社会科学院会員、大学研究員、教授等と多士済々であります。また韓国の同窓の中では姜英勲（3期）が総理大臣になった他、軍参謀総長、政官学経済界の名士が多い。日本と違って改名の強要の無かった満州国・建国大学に対する評価は韓国同窓生の間では悪くない。正に建国大学の創立目的である国家社会の棟梁たる人物の育成に成功したのではないか。

提言としまして、昨年8月22日愛知大学と東北師範大学は3週間にわたる現地実習活動を終え、盛大な報告会を行ないました。大きな成果を得たと言えます。この裏には特に東北師範大学日本語科教授の谷学謙氏の協力に負うところが多大でありました。学長より特に谷学謙先生に感謝状を贈呈され、感激の極みであります。

提言の1番目としまして、東北師範大学に寄宿制の学院を設立する。学生は日本・中国のみならず、アジア各国より募集し、寮に住み共同生活を通じ、お互いの言語・文化・習俗を学び理解し、また一生の宝とする友人を多く作ること。グローバル時代には支配・被支配の無い、真に独立・自由をモットーとした学園が必要不可欠だと思います。東北師範大学はすでに日本文科省の全中国公費留学生のオリエンテーション施設があり、また愛知大学の過去10数年にわたる対中国実績より見て、文科省もまた中国教育部も理解が早いと思われます。学制・学部は小さく生んで大きく育てたらいいと思います。また長春には東北師範大学以外、前述の長春大学および陳堅（7期）がほとんど独力で設立した長春工業大学人文信息学院など、同窓の人間関係のある大学もあり、彼らの協力も得られるのではないかと思います。森林の都と言われる長春は、今では樹木も多く、東北地方の文化都市にふさわしく大学研究機関が多く、北京・上海等の喧騒から隔離され、落ち着いて勉学に勤しむ条件・環境に恵まれている。なお参考までに上海のカナダ、イギリス等の大学は、前期2年は上海、後期は本国で教育をしています。

2番目としまして、愛知大学と東北師範大学との現地実習協定の締結を祝い、両校のさらなる交流の強化と日中友好の増進を祈念し、日中友好記念碑を豊橋の愛知大学構内に建立したいと現在思っております。

3番目として建大同窓会の子女会と、愛大同窓会との交流を深め、将来にわたってこれの存続と発展を図りたいと思います。

以上でございます。

【司会】 ありがとうございました。最後には3点ほどのご提案もいただきました。これも建国大学でのご経験を踏まえて、その後の建国大学卒業生との交流の中で構想を抱かれたというふうに思われます。何かご質問ございますでしょうか。はいどうぞ。

【質問者】 建大の卒業生が在学の経験があるために、文革の時には相当やられたんじゃないかと思いますが、その点についてたぶんお聞きになりご存じだと思いますので、ちょっとお話していただけませんか。

【佐藤】 まあいろいろありましてね。いわゆる実権派というのとそうでないのと。たとえば瀋陽と長春はあんまり仲が良くない。どうも瀋陽におった人達は、文革の時も恵まれた人がおった。ところが長春の人はそうじゃない。私共が一番親しくしてた凌振礼という人は、お父さんが最後は満州国吉林市の警察署長だった。ところが本人は在学中に先ほど言いました読書会のリーダーになりまして、終戦の年のちょっと前には学校から出て吉林のほうへ行ってたんです。従って彼は学校は辞めておりますが、そういうことで新中国の、特に吉林市と長春市の解放にはものすごく尽くしてるんです。尽くしてるのでお父さんが元警察署長であったにも関わらず、ほとんどお咎めもなく90何歳まで存命でした。ところが本人はずーっとそれだけ努力をして共産党に尽くしたのに、どことなく満州国、まあ偽満の時代の建国大学だという

ことがひとつひっかかりまして、どうも大変です。それで最後まで李瑞環という中央の偉い人がいたんですが、その人にいつも手紙を書いていた。一応は平反と言いまして、文革の時に罪に落とされたのはもう許してもらってるんですけど、依然として面白くないということで、しょっちゅう手紙を出してたということを息子が言ってます。

息子は52歳で、私は長春に行きますといつも世話になってるんです。迎えに来たりなんかして。その息子の息子が、去年北京の武警大学といって武装警察の大学に入学する時に、親父は「お前絶対に警察になるな。公安に入ったら駄目だ」。まあ入ったら駄目じゃなくて、共産党のいわゆる政治的な活動をするなということを盛んに言われて、共産党の大学じゃなくて武装警察、いわゆる警察とちょっと系統が違うらしいんですね、中国の場合。そちらのほうへ行ったということを言ってます。だからやっぱり他にもたくさんありますけど、だいたい文革の時には目を付けられた人が多いです。われわれの同窓生もたくさんいて、親日家の人が多いですけど、それでも未だに建国大学のことを言う場合は、慎重に物事をはこんでいる。

数十人が当時のことを回想した文章を翻訳した、こんなに厚い文集があるんですが、それを見ますと、やっぱり彼らは日本の侵略（建国大学を作った…）についてはものすごく批判してるんです。八紘一宇とか民族協和とか、そういう言葉について。ところが下の者同士、学生同士の平素からの共同生活の中で生まれてくる絆については非常に高く評価してます。従って戦後すぐ向こうの同窓といろいろ交流したりしまして、私も全部で子女の数は５人なんですけど、同窓３人の保証をして日本に留学させ、今日本で働いています。その他いろんな交流が進んでおります。従ってやっぱり国際的な学校を１つ作って、日本人の同窓だけじゃなく向こうの人も一緒になっていろいろやっていけば、これからの愛知大学も非常に将来発展して、アジアの大学としてふさわしい、良い学校ができるんじゃないかと思いまして、今提案を申し上げました。

【司会】 はい、ありがとうございました。それでは最後５番目の園部先生であります。園部先生は台湾の台北高校のご出身です。その後四高へ行かれましたけれども、創設期の愛知大学にお父様が教授として赴任されまして、そのお父様と共に愛知大学の学内で生活をされたという、非常にこれも貴重なご経験かと思います。今回この催しの中で、ぜひ私も参加したいということを髙井さんのほうに強く申し入れられたということでありまして、嬉しい限りであります。そういうわけでまた貴重な視点からお話がいただけるかと思います。ひとつよろしくお願いいたします。

【園部】 園部です。よろしくどうぞ。今日のコメンテーターの髙井先生は、私は西新橋の法律事務所に机を置いてるんですけど、すぐ近くの霞が関のビルに住んでおられまして、近いものですから一度この会と似たようなことを髙井先生の事務所の近くで催したことがあるんですけれども、そこまではお引き受けしたんですが、そしたらついでにこっちも来いということでございます。私は前の４人の方と違って原稿もろくに用意しておりませんで、やっつけ本番で、しかも学会のような報告ではなくて、漫談でございますのでいくらでも伸縮自在で、時間になれば終えますので、よろしくどうぞ。

私は愛知大学も、愛知大学の予科も卒業しておりませんで申し訳ないのですが。今日のお話の角度は、つまり戦前の植民地ないし満州国・中国の高等教育がどうであったか、あるいはその後の、戦後の状況はどうであったか、という観点からお話ししたいと思っています。私の父は引き揚げ後、東京の明治大学に奉職しておりましたけど、何しろ戦争直後のことで住むところが無く、台湾から